

## その 19

### 二人の元日文研所長



国際日本文化研究センター図書室（京都）

春楊 葛山 發雲 立座 妹念

これが、歌である。これで、日本の和歌、つまり、短歌で、文字通り、短い歌である。わが国の短歌史上最も字数の少ない歌で、歌の聖柿本人麻呂作（人麻呂作に関しては後述する）、その万葉仮名による歌の原文である。この歌の訳文と口訳は、次の通りである。

「春柳 葛城(かづらき)山に 立つ雲の 立ちても居ても 妹(いも)をしそ思ふ」

（葛城山に立つ雲のように、立っても座っても、あの子のことばかり思っている）

柿本人麻呂（巻 11・2453）

三十一文字（みそひともじ）の歌が見事に 10 文字の漢字で表現されている。

「日めくり万葉集」で、この歌を選んだ選者は、哲学者の梅原猛氏。梅原氏は、この歌を選んだ理由を次のように語る。「万葉集の中で、10 文字という最短の字数で表されています。1 字 1 字にイメージがあり、その連続で見事に全体がつながっています。春柳は、もう柳の芽が吹くシーズンだということを表しています。遠くの葛城山には雲がモクモク湧いている。その雲のように、恋心がムクムク起こってきて、あなたが恋しくて居ても立ってもいられない。これは間違いなく、人麻呂の若き日の熱烈な恋の歌です」。

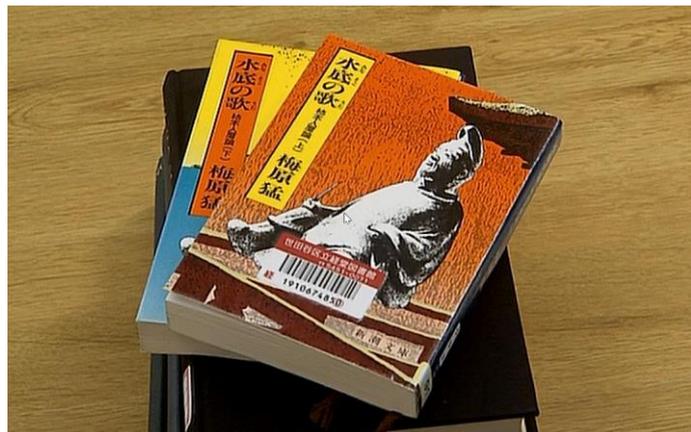
「日めくり万葉集」のプロデューサーを担当するにあたって、会って話を聞いてみたい人が 2 人いた。現役時代はお付き合いする機会がなかった、いわゆる大家である。その 1 人が梅原氏で、いくつかのルートを探ってはみたものの、残念ながら出演交渉の手がかりが見つからず行き詰ってしまった。そして、もう 1 人が作家の阿川弘之氏だった。阿川氏と言えば、すぐ身近に「阿川のおじさま」と親しく呼ぶ人がいた。「日めくり万葉集」の語り手檀ふみさんである。檀さんに相談すると、梅原氏とも親しいという。そこで、檀さんに紹介してもらって、お二人に連絡すると、2 人とも「万葉集の話なら」と即快諾いただき、まずは梅原氏のインタビューになった次第である。阿川氏の話は、いずれ紹介する。そして、梅原氏が選んでくれた万葉秀歌 2 首の内の 1 首が、この「春

柳]の歌だった。

梅原氏は言う。「詩人というのは、やはり恋の歌から出発するんじゃないでしょうか。しかし、人麻呂の最後は悲劇的でした」。

実は、梅原氏に会いたかったのは、その「悲劇的」な人麻呂の物語を聞きたいがためだった。

1970年代、梅原氏は法隆寺の建立をめぐる大胆な仮説を提起するなど、古代史の謎に迫る「梅原古代史」を展開して注目を集めた。その一環として、梅原氏は、1972年から『水底の歌』の連載を始めている。歌聖柿本人麻呂は、その生涯が長く謎とされていたが、この作品で、その悲劇の生涯を明らかにしたのだ。人麻呂は、時の政権に追われて流罪となり、石見の国で水死刑に処せられ、万葉集にその名をとどめるだけで、その名は正史から消された。そして、「日本書紀」などに名前が残る柿本佐留や猿丸太夫が人麻呂なのでは、という。つまり、人麻呂は、懲罰として、ヒトからサルに名前を変えられたのである。それは、従来の人麻呂像を根底から覆す大胆な仮説だった。この説に対しては、発表直後から批判があり、歴史学会では受け入れられなかった。現在も人麻呂の最期については諸説あり、梅原説を含めて学会では結論が出ていない。



梅原猛著『水底の歌』  
(1973年刊)

『水底の歌』から、早くも半世紀近く経っている。そこで、インタビューの中で単刀直入に、今でも、「人麻呂水死刑」説は正しいと思っているかどうか、聞いた。

「100%間違いないと思っています。しかも、私独自の説じゃない。『古今集』以来の人麻呂にまつわる伝承を検証すると、人麻呂は流人だとする説が至る所に存在します。そして最終的には刑死したのではないか。ここに悲劇があるのです」。

打ち合わせの時は明言したのだが、インタビューになると、つまり本番の時には明確に答えてくれなかったことが1つあった。「春柳の歌」の作者は、一般的には「柿本人麻呂歌集から」となっていて、「日めくり万葉集」でも、通説に従い、そのように紹介している。と言うのは、「人麻呂歌集」は万葉集成立以前の歌集で、人麻呂自身の詠と収集された歌が集められており、従って、歌集に収められている歌は、人麻呂作の歌なのか、人麻呂が集めた歌なのかの区別ができないからである。ところが、梅原氏は、人麻呂作の歌はもちろん、人麻呂が集めた歌も、その歌のレベルから判断すると、人麻呂の手が入っていることは間違いない。だから、人麻呂歌集の

歌はすべて人麻呂作と言っていい、ということだった。ただし、本番では歌集の歌すべてとは踏み込まずに、この「春柳の歌」は人麻呂作として、冒頭の話にもあったように「これは間違いなく、人麻呂の若き日の熱烈な恋の歌です」と話してくれた。そこで、本稿では、梅原氏に敬意を表して人麻呂作としている。

そして、インタビューの最後の山場のところだった。

「万葉集は単に抒情を詠うだけでなく、その中には恐ろしい人間の悲劇が隠されていました。これを見い出したことは大きいですね。ある意味で……（ブー、ブー、ブー）」。突然、梅原氏独自の万葉集論の肝心のところで携帯電話がけたたましく鳴り響いたのである。それもすぐ近くで。本番の時携帯を切るのは、テレビマンの鉄則であるが、先生に確認することを忘れていたことに気がついた。プロデューサーとしては初歩的なミスだった。カメラを止め、先生に「どうぞ携帯に出てください」と勧めると、「持ってない」、と言う。それで、私は冷たい目で周りのスタッフを見回す。それぞれが携帯を取り出し確認するが、皆小さく首を振る。しかし、コール音は、相変わらず鳴り続けている。ということになると、その後にはやってくるプロデューサーの悲劇はすでにお見通しのことだろう。インタビュー役の私の携帯が鳴っていたのである。自分自身へいらだちに、突っけんどんな声で、電話口に「本番中」と一言告げると、落ち着いた女性の声で、「失礼いたしました。所長はこの後外出されますが、今だったら空いていますので、すぐ所長室にいらしてください」。

「今は行けません」と言って携帯を切り（今度は電源も落として）、気を取り直して、梅原先生に話の続きを聞いた。「……ある意味で、万葉集は政治的な歌集です。素朴というだけでは片づけられない、権力者に迫害された人間の深い悲しみが染み込んでいる。それだから素晴らしいのです」。

電話の主は、梅原先生の三代後で、女性初の日文研所長となった片倉もとこ氏の秘書の方だった。

日文研とは、京都にある国際日本文化研究センターの略称で、1987年に設立された、日本文化を国際的な視野のもと、学際的かつ総合的に研究していこうとする研究機関で、その初代所長が梅原氏だった。当初私たちは、梅原氏の自宅が京都若王子の哲学の道の近くで、石段を5分くらい歩いて昇ったところにある、哲学者の故和辻哲郎氏の旧邸ということを知っていたので、インタビューは雰囲気のある先生の自宅で、と考えていたのだが、先生から日文研の会議室を指定された。残念だったが、それはそれで、個人的にはありがたかった。というのは、四代目所長の片倉先生は、以前からの友人で親しくしていたので、久しぶりに会えるかなと事前に連絡を入れていた。しかし、その日は、たまたま日文研主催のイベントがあり、出たり入ったりしているので、時間が空いたら、携帯に電話するということになっていた。それもあって、携帯の電源を切り忘れたのだが、言い訳にはならない。ところが、この1本の電話から物語が始まったのだ。この失態がなければ、たまたますれ違いとなった片倉先生にご挨拶をすることもなかったが、後日秘書の方への非礼をお詫びするため、先生に電話を入れたところ、思いもかけない、ある「万葉集物語」が、その姿を露わにしてきたのである。

片倉先生とは、30年以上前からの付き合いで（ということで、以降は、愛称の「もとこ先生」と呼ばせてもらう）、当時NHK特集「海のシルクロード」のプロデューサーを担当していた私は、取材の一環で、イスラーム研究の専門家としてもとこ先生に話を聞いたことがあった。先生は、1960年代後半から、アラビア半島のサウジアラビアをはじめとして遊牧民（ベドウィン）の人々と生活を共にしながら調査する、フィールド・ワークを行っていた。厳しい自然条件の中で、先生は家族を日本に残し一人研究を重ね、数少ない女性研究者として、男性が立ち入ることができない、そのため、これまで研究がなされていなかったアラブ女性の世界を明らかにした。

取材当時、もとこ先生は、長期にわたるフィールド・ワークで得た知見から、沙漠の民ベドウィンは、古来沙漠だけではなく、海に乗り出していたのではないかという仮説を想起し、それを実証するため調査を進めていた。そして、UAE アブダビの文献センターに保管されていた古い文献から、それを裏づける事実を見つけ出していた。それは、学術的なスクープと呼ばれるにふさわしいものであった。そこで私たちは、もとこ先生に、その「海のベドウィン」について取材させてもらったのが、最初の出会いだった。

そして、東京に戻ってから、もとこ先生に電話を入れ、改めて失礼の段をお詫びした後、先生が日文研所長に就任した時から疑問に思っていたことを尋ねた。

「日文研の頭には、確かに『国際』とはついているのだけれど、イスラームやアラブ文化研究の文化人類学者である先生が、なぜ日本文化研究の殿堂とも言うべき日文研の所長に担ぎ上げられたのですか？」

そして、返ってきた答えが、意外にも「万葉集」だったのである。「今回梅原先生に取材された同じテーマ、『万葉集』がきっかけだったのよ」という。

思いがけない答えに、最初よく理解できなかった。アラブ文化研究がなぜ万葉集？そこで、「そもそもなぜ万葉集なのですか？」と、聞くと次のよう経緯だった。

もとこ先生は奈良市の生まれ、それも春日山の麓で、小学校に入ると明日香村に移り住んだという。言うまでもなく、ともに万葉集のメイン舞台である。学校は、明日香小学校で、学校が終わると、明日香の古い都の跡でよく遊んだ。必然的に万葉集とは身近に接して、明日香村の歌など、いくつも読んだという。中でも一番好きな明日香村の歌は、次の歌だったという。

「飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて去(い)なば 君があたりは 見えずかもあらん」

（飛ぶ鳥の明日香の古京捨てて行ったら、あなたの辺りは見えなくなりはしまいか くまた「あなたの辺りを見ずにいられるだろうか」）  
元明天皇(巻1・78)



藤原京跡  
(奈良県橿原市、明日香村)

遷都のため、藤原宮から平城宮(ならのみやこ)に移る途中、元明天皇が詠んだ歌である。

「この歌の中の『去（い）ぬ』って言葉をとっても好きなの。『去る』って言う意味ね。それでね、『あんた、いついのはんの？』とか、『はよ、いぬまわりせんとあかんで』という風に、今も、奈良の人々の間には、万葉の言葉がそのまま残っているのよ。この歌は、遷都の歌で、万葉の時代、明日香村の中でも、何度も宮を移り、また、明日香から大津や橿原に移るなど、この時代しばしば遷都をしたの。そういう文化があつた頃あつたんでしょうね。だから、あちらこちらに、ここに昔、都があつたんだっていうところがありますものね。都を簡単に引越すするというような軽やかさっていうのも万葉の時代の特徴なんでしょうね。移すことによって、『常若（とこわか）』、常に若いっていうかな、そこが、面白いところなんだけど、それって、アラビアの文化とも共通してるんですよ」。

そして、「これまで誰にも話してなかったのだけれど……というより、誰にも聞かれなかったから話したことがなかったのだけれど……」と前置きして、この小学生の時の万葉集体験がそもそもの原点で、わが国の文化人類学のパイオニア、梅棹忠夫先生の門下となり、その後、「移動文化」の研究をテーマにすることになったのだ、という。イスラームやアラブ研究のルーツが、古代日本の「まほろば」奈良にあり、その DNA には「万葉集」があつたと、「初めて」話してくれた。そして、日本に戻った現在は、「万葉集」の舞台となった、天智、天武、持統天皇にわたる時代に、何回も繰り返された「遷都」とともに、その時期に持統天皇により始められた「遷宮」、とりわけ、伊勢神宮の式年遷宮が、もとこ先生の目下の研究テーマであつた。20 年ごとに行われる伊勢神宮の遷宮は、今回が第 62 回目で、それは 2005 年から既に進行していて、この 2013 年に、神体の渡御である正遷宮が行われることになっている。そのため、所長となつた今も、先生は、その取材のため何回か伊勢に通っているし、これからも通うことになると話していた。

ところが、その肝心の 2013 年に、もとこ先生は亡くなられることになる……。

こうして、30 年以上のお付き合いの中で、アラブ文化研究の文化人類学者もとこ先生が万葉集を、一方ドキュメンタリー志向のプロデューサーだった私が万葉集を、ということで、その時まで、それぞれが万葉集に関わりを持っていることをお互い知るべくもなかつた。そこで、急遽、もとこ先生にも、「日めくり万葉集」の選者として出演してもらうことにした。そして、2 人の元日文研所長が、相次いで番組に登場することになったのである。

そして、160 人を超える全選者の中で、最も身近に万葉集の世界と接してきた出演者、そう、万葉集の申し子のようなイスラーム学者、もとこ先生を発掘することができたのも、あのたまたまの、いや、私のミスによる電話騒動がきっかけだったのである。

けがの功名、失敗も時にはいいものだ。なぜなら、そのミスが、単にもとこ先生の「万葉集物語」を引っ張り出しただけでなく、さらにもう 1 つの『萬葉集物語』の発掘につながることにしたのだから……それについては次回以降、何回か報告することになる。



アラビア沙漠の片倉もとこさん